医者も知らない平穏死

連載㉝

雑談も大事

在宅訪問する時、私は患者さんの様子を見る一方で、介護をしているご家族の話をよく聞くようにしています。その比率は、ちょうど半々というところでしょうか。

「新しい花を庭に植えたんやで。先生、どう？　きれいやろ？」

「駅の近くにできた寿司屋、行ってみたんやけど、イマイチやったわ。あれやったら、隣駅の別の寿司屋の方が安いし、ええなぁ」

「最近、膝が痛くて、犬の散歩するのつらくなったわぁ」

介護の話に限らず、いろんな話題が出てきます。以前、在宅療養の勉強にこられた医師が私に同行したのですが、「病気の話ばかりするんじゃないんですね。雑談ばかりじゃないですか」と驚いていました。まさに、そう。でも、雑談が大事なんです。

大切な家族のためとはいえ、介護生活はどうしてもストレスがたまります。特に、ひとりで介護をなさっている方は、そのはけ口がないために、「虐待」という発作的な行動に至る場合があります。ほんの小さな虐待は珍しくない。私たち在宅スタッフは、介護をするご家族との会話の中から、虐待の芽を見つけ出すことが必要なのです。

Hさん（83）は、認知症のご主人（85）の在宅介護を続けて3年。ご主人は本当によく食べる方で、Hさんが「もう食べたらあかん」と言っても、聞こうとしません。

私が在宅訪問をするたびに、Hさんは言います。

「ホンマ、お父ちゃん腹立つねんで。何回言っても言うこと聞かへん。時々、殺したくなるわ」

言葉にできるうちはまだ大丈夫と思いながらも、「どないに腹立つんや」と私は毎回返します。Hさんはせきを切ったように、ご主人へのグチをぶちまけます。でも、帰る頃には、「先生、いつもありがとうな。口にしたら、すっきりしたわ」と言います。実は、これも毎回のことなのです。

（写真はイメージ）

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に『「平穏死」10の条件』など。